



孺恋村に現存する分去茶屋助四郎による「勸化帳」。江戸時代に六里ヶ原を旅する人たちの大変な状況が示され、旅人の安全のために西国三十三ヶ所にちなんだ観音像を設置したいこと、観音一休あたり「銀二十五匁」(現代に換算すると約31,000円)の寄付を募りたいことなどが記されている。



参道の両側にずらりと並ぶ百体観音。左右一列目に安置されているのが江戸時代から残る道しるべ観音。十一面観音、千手観音など様々な種類があり、寄進者の名前や地名がはっきり読み取れるものも多い。二列目以降は平成に入ってから復元されたもの。



地蔵堂に近い右手に立つ基点観音。馬頭観音で、馬頭の部分にはうっすらと朱の着色が残っている。台座に刻まれた銘文からは、建立に関わったとみられる54名の人名のほか、天明4年の計画から寛政5年の開眼まで十数年の年月がかかった様子が見てとれる。



県道235号(大笹北軽井沢線)沿いにある桜岩地蔵堂。



vol. 27 六里ヶ原の往来を今に伝える 桜岩地蔵尊と道しるべ観音



数奇な運命を辿ったお地蔵様。

死人が出ることもたびたびあったと言われています。天明の噴火から20数年後の文化5(1808)年、そんな状況を見かねた分去茶屋の助四郎という人が勸化を行い、近隣の人々の寄進により立てられたのが道しるべ観音です。観音石仏は、現在の砂塚付近にあった「上の分去茶屋」を基点として、沓掛(中軽井沢)・狩宿・大笹の3方面の道路沿いにそれぞれ一番から33番まで33体、基点観音と合わせて計百体が設置されました。その間隔が一丁(約110m)ごとであったため、丁杭観音とも呼ばれています。観音の寄進者は、狩宿、大笹、羽根尾、草津、信州側の高井郡(須坂周辺)や佐久郡など近隣の村々を中心に、高崎や、遠くは甲府の者の名前もあり、この街道が交易に重要な役割を担っていたことが見て取れます。

百体あった観音も長い歳月の間に大部分が姿を消してしまいましたが、このうち現存する三十数体が桜岩地蔵堂境内に集められ、町の指定文化財になりました。平成2年には地元の有志により百体に復元され、往時の姿に近づけられました。

今でこそ高原のリゾート地として開発・整備された北軽井沢エリアですが、かつて六里ヶ原と呼ばれたこのあたり一帯は、人家もなく、無人の高原を旅人がまばらに往来するだけでした。浅間山が噴火をすれば、そのたびに直接被害を受けていただろうと思われませんが、特に天明3(1783)年の大噴火では一面が砂原となり、風が吹けば道は消え、雪が降れば旅人は方位を失い、

**天明の噴火の被害を受けて
奇進・建立された道しるべ観音**

北軽井沢「桜岩地蔵堂」境内にずらりと集められた観音さま。これらの観音はかつて、噴火の影響で荒涼とした浅間北麓・六里ヶ原を往来する旅人たちの大切な道しるべであり、拠りどころでもありました。今回はこの道しるべ観音と、同じく旅人を見守った桜岩地蔵尊の歴史についてご紹介します。



昭和62年、町指定重要文化財に指定された桜岩地藏尊。桜岩という地名は、岩を割った桜の大木が両側にあったことに由来する。

ばねます。たまりかねた延命寺側は、宝暦12（1762）年、寺社奉行に訴状を提出。裁決の結果、延命寺側が勝訴となり、お堂は取り壊され、地藏尊は他の場所に移されることになりました。

その後、天明の噴火にも遭い、地藏尊は行方不明となりましたが、大正7（1918）年、旧草津街道の岩屋橋近くで見つかり、草津軽便鉄道株式会社により現在の場所に移され、安置されました。

穏やかなお地藏様の顔からはそんな波乱万丈な物語があったとは想像もつきませんが、道しるべ観音とともに、かつて浅間北麓・六里ヶ原を苦労して行き交った人々の様子や祈りの思いを、静かに今に伝え続けているのです。

◎今回紹介したのは…

桜岩地藏尊、六里ヶ原道しるべ観音

参考文献：「北軽井沢桜岩地藏堂境内の六里ヶ原道しるべ観音」（町教育委員会制作）、「長野原町誌」、「嬭恋村誌」

ふるさと再発見

[27]
—文化財だより—

【樋口屋敷跡】 聖地に打たれた 一本の標柱に残る思い

日本一の剣士と称えられる上泉伊勢守は上州人であった。青年期に武者修行に行った鎌倉で念流に出会い、赤城山に籠って「新陰流」を編み出した。彼が剣聖とも呼ばれるには剣法を出世や殺傷の道具としない念流の精神を貫いて生きたからであろう。

木曾義仲の四天王樋口兼光から11代目の兼重も念流に出会った一人である。彼は念流始祖の直弟子となり、現在34代が念流25世を継ぎ、高崎市馬庭に道場倣士館を開いている。

一旦移り住んでいたのである。場所は小代から常林寺に下って行く途中の小宿の道の右にお堂があるが、その向う下が樋口屋敷跡。近くは常林寺ゆかりの龍燈山に守られ、遠くは小宿川の谷からすそ野を持ち上げる浅間山を望む山紫水明な武術の里にふさわしい地勢を持つ。高重は一五〇〇年までここに道場を構えていた。今となっては一四四五年と記してある一本の標柱にその期間の思いが凝縮されているのみである。

今回は「ニホンカモシカ」を紹介します。

ところで馬庭に最初に道場を開いた人物樋口13代高重は信州樋口村出身だが、馬庭に行く前に長野原町に



(上)今は畑になっている屋敷跡からは、浅間山が望まれる。(右下)「馬庭念流ゆかりの地一四四五年」「樋口高重新左衛門尉 道場跡」(左下)「上野國吾妻郡小宿村 文安式年」

延命寺VS常林寺の紛争勃発！
数奇な運命を辿ったお地藏様

一方で今、桜岩地藏尊のなかに安置されている地藏尊も数奇な運命を辿ったことと知られています。

道しるべ観音建立のきっかけとなった天明の噴火より30年ほど前。寛延4（1751）年、同じく砂塚の分去茶屋近くに、狩宿村の人々が浅間越えの旅人たちの安全を願って二間四方のお堂を建て、地藏尊を祀りました。お堂は浅間山里宮として旅人たちが参拝に立ち寄ったり、街道沿いの休憩所やお助け小屋としての役割も果たしました。ところがこれに怒ったのが、鎌原にあった延命寺です。延命寺は「当方が既に浅間山鬼神堂に虚空蔵菩薩と地藏菩薩を本尊として長年奉祀しているのに、何の断りもなしに浅間山里宮と名付けた新堂をつくるのは不届きである」とし、他の場所に移すよう申し入れたのです。しかしそれに対して、地藏尊の開眼供養をした常林寺の和尚は「一寸たりとも動かすことは罷りならん」と主張。また狩宿村の名主も「異議があるなら潰すとも焼き捨てるとも勝手にされたい」と答えるなどして申し入れを突っ

旧街道と道しるべ観音MAP

かつての街道が通っていた場所と、桜岩地藏堂境内に現存する観音がもともと置かれていた場所を再現してみました！大笹に向かう街道は別荘地開発により道路自体が消滅。狩宿（応桑）方面への道も今の国道とは異なり、「下の分去茶屋」（現在は蕎麦店）のところから一本西側を通っていたことがわかります。

※嬭恋村・田村氏が昭和30年代に記した地図をもとに作成。（厳密には多少のズレもあります。）